

In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University merge to Osaka Metropolitan University

Title	(第2章)みんぱく研究公演「城山虎舞 in みんぱく」(2017)
Author	須藤 健一, 吉田 憲司, 日高 真吾, 菊池 忠彦, 笹山 政幸, 橋本 裕之, 中川 眞
Citation	URP「先端的都市研究」シリーズ. 29巻, p.17-42.
Published	2022-03-15
ISBN	978-4-904010-44-0
Type	Book Part
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学都市研究プラザ
Description	阪神虎舞の誕生：被災地芸能の文化的脈絡の拡張
DOI	10.24544/ocu.20220516-055

Placed on: Osaka City University

Osaka Metropolitan University

第2章

みんぱく研究公演「城山虎舞 ．みんぱく」(2017)

須藤健一（国立民族学博物館館長）、吉田憲司（国立民族学博物館副館長）、日高真吾（司会、国立民族学博物館准教授）、菊池忠彦（大槌城山虎舞総会長）、笹山政幸（被災文化遺産所在調査専門調査委員）橋本裕之（追手門学院大学教授）、中川眞（大阪市立大学教授）（*肩書きは当時のもの）



ディスカッション〔日時：2017年3月19日、場所：国立民族学博物館講堂〕
(写真提供：国立民族学博物館)

はじめに

日高：今日はみんなく研究公演「城山虎舞 in みんなく」にお越しいただきまして、まことにありがとうございます。この会の司会を担当させていただきます日高と申します。半日ですが、よろしく願いいたします。それでは会に先立ちまして、当館・須藤健一館長より一言ご挨拶申し上げます。

須藤：本日は「城山虎舞 in みんなく」にお集まりくださいまして、まことにありがとうございます。民博館長の須藤健一です。開演に先立ち、一言、ご挨拶を申し上げます。

岩手県大槌町・城山虎舞は、虎の微妙な表情や動きなどを繊細に演じるのが特徴で、1996年に20名の若者たちによって結成された民俗芸能団体です。大槌町をはじめ三陸の町や村では、お神楽、しし（鹿・鹿子・獅子）踊、七福神（舞）、剣舞、鶏子舞、手踊り、念仏踊などなど、多彩な郷土芸能が演じられております。

この城山虎舞は、豊漁、豊穰、家と街の安寧などをお願いする9月の鎮守様の祭日に奉納される舞でもあります。城山虎舞の演者さんたちは、東日本大震災の翌月から避難所にて虎舞を披露し、また震災復興祈願祭や大槌復興祭りや海の盆など、あらゆる機会に虎舞を演じて、被災者のみなさまを元気づけてきております。みんなくは、東日本大震災で流出あるいは破損した郷土芸能の祭具や衣装などの修復を手伝ってまいりました。その縁で、震災の翌年（2012年）から毎年、被災地から鹿踊、太神楽、神楽、じゃんがら念仏踊りなどをお招きして、この講堂で研究公演を行ってきております。

本日の虎舞は、本館教授の竹沢尚一郎さん主催の企画展示「津波を越えて生きる一大槌町の奮闘の記録」の関連イベントとして催すものです。竹沢さんは、震災直後から大槌町で被災者のそばにいて、苦しみをわかちあい、人びとの家や町の再生に向けての希望とその実現のために、活動をともにしてきました。竹沢さんのこの大槌町にかける思い、あるいはその被災の状況と、そこから立ちあがる人びとの気持ちが展示にあらわされておりますので、皆さまぜひ見てやってください。

大槌町は、大津波で多くの方々が亡くなられ、家は流出し、町は壊滅してしまいました。私は昨年（2016年）11月に大槌町を訪問し、いまだに被災

者の方々が、家の再建と人生設計に希望が見えないという悲惨な状況に置かれていることを知り、茫然となりました。本日の虎舞公演者の方々も、依然として仮設住宅に住むなど、過酷な生活を余儀なくされています。けれども、人生設計や住まいと町の再生のめどが立たないからこそ、虎舞の実演に情熱を傾けて、将来に備えるのだと語ってくれております。みんなくが毎年、被災地から民俗芸能集団をお招きして研究公演を開催するのには、三つのわけがあります。

一つは、関西の方々がご存じではない東日本大震災の被災地・三陸の町や村が、郷土芸能の宝庫であることを知ってもらうためです。この地方では、町や村ごとに、異なる多彩な郷土芸能が演じられてきました。この祭りや芸能とともに暮らし、それを大事にする三陸の人びとの豊かな気持ちと、その公演のレベルの高さは驚くばかりです。

ふたつ目は、祭りや芸能は生活の再建や町の復興後に余裕ができてから再開するものと考えられがちですが、実際は、郷土芸能が演じられるからこそ、被災地の住民が結びつき、復興への希望と熱意を新たにできるのだということを知ってもらうためです。大槌町の隣の釜石市の年行司支配太神楽の長老は、「失われた神楽の復興は、それを担う多くの人びとが集まって助け合い、心をひとつにして村を興すことになります。この神楽は自分たちの心のなかのふるさとであり、生きるあかしになっています」と述べていました。自分の心のよりどころとなり、ふるさとへの意識と誇りを確かめ、人びとのつながりを強めることに役立っていることを、この虎舞は私たちに教えてくれると思います。

阪神・淡路大震災から20年がたちました。私たちの頭からあの悲惨な光景と経験が薄れていこうとしています。本日の城山虎舞の公演をとおして、東日本大震災でこうむった未曾有な体験を東北の被災者の方々と我われが共有し、それを記憶にとどめ、将来起きるであろう震災に備えることが三つ目の目的です。

みなさま、本日は、城山虎舞の多彩でたおやかで、そして勇壮な演舞を堪能されるとともに、郷土芸能のこれからについての虎舞の演者さんたちを交えた討論会も聞いてください。本日のご来館に、館長としてあらためて感

謝いたします。これにて私の挨拶を終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

日高：続きまして私のほうからも、簡単にこの城山虎舞を行うに至った経緯についてご紹介したいと思います。この国立民族学博物館では、2011年の東日本大震災以降、私たち「みんなく」として何かできないかということを考えて活動してまいりました。その一つに、この地域の無形文化財、文化遺産と言われるものとかかわりながら何かお手伝いすることができないかということから始めたのが、今回の城山虎舞を初めとする震災関係の研究公演ということになります。2012年から始めたこの研究公演のシリーズとしては7回目になります。

現在、企画展「津波を越えて生きる―大槌町の奮闘の記録」を開催しておりますが、その大槌町ゆかりの城山虎舞の皆さんに来ていただいて、虎舞を見ていただくということになります。私たちは、民俗芸能は復興を後押しし、被災者の方々の大きな力になるのではないかと考えました。そこで、民俗芸能を通した何かを私たちでできないかということを考えてとき、あらためて、実際に演じる場がないと芸能も再開できないということを知りました。そこで、みんなくにお招きして、それぞれの皆さんの芸能を関西の皆さんに知ってもらうという機会を持つところから始めようというのが、この研究公演のきっかけです。そしてこの研究公演のシリーズは、幾度かの企画を実施することで、東北への支援から、民俗芸能をはじめとする地域の文化が、どれだけ私たちの生活に深くかかわっているのか、このことを三陸の東日本大震災で被災された団体の皆さんから教わる場へと、研究公演の

目的の意味が変わってきているのではないかなと感じております。今日は城山虎舞の皆さんに若手育成のことからこれからの広がりということについてもお話しいただけるかと思います。東日本大震災に対してもう一度、私たちには何ができるのかというようなことに思いをはせながら見ていただくとともに、自分の周りにある、かけがえのない地域文化のすばらしさを感じていただければ幸いです。

さて、この城山虎舞。虎舞というのは新聞等々でいろいろと目にされた方も多いかと思います。三陸の中ではとても人気の高い民俗芸能になっております。その概要につきまして、追手門学院大学の橋本裕之さんよりご紹介いただきます。

城山虎舞について

橋本：こんにちは、橋本です。もう3人目になりますので「はよせえや」ということになると思うんですけども、虎舞のことは関西の人はさほどご存じではないかなと思いますので、ごく簡単に説明したいと思います。岩手県は民俗芸能の実に盛んなところですよ。私は以前、震災の前後に盛岡大学で教えておりました、岩手県の文化財保護審議委員をしておりました。それで震災の後、支援の仕事をするようになって改めて気づいたんですけども、内陸はもちろんのこと、岩手県の沿岸でも大変な数の民俗芸能、郷土芸能が行われていて、そのような芸能が、先ほど館長からもご説明がありましたように、そこに住んでいる人たちの喜びとか生きがいとか、本当に大事なものになっているんです。生きる支えみたいなものですね。無形民俗文化財だからとかいうよりも、本当に自分たち自身の大事なものとして存在している。なので、先ほど館長がおっしゃったように、地域復興がなってから郷土芸能をするのではなくて、むしろ郷土芸能をすることが地域復興につながっていく、非常にパワフルなきっかけなんだということを、岩手に4年しかいなかったんですけども、改めて感じました。

虎舞は宮城県にもあるんですけども、岩手県沿岸部の郷土芸能について言えば、実は歴史的には関西がきっかけです。近松門左衛門の浄瑠璃、歌舞伎にもなっていますけども、「国性爺合戦」というのがございますよね。そ

の中に和藤内の虎退治のお話があります。それを見た吉里吉里善兵衛という三陸沿岸の有名な豪商が、自分のところの船頭さんに習わせて、大槌よりちょっと北の山田町で始めたのが虎舞の起源だと言われています。それが沿岸の釜石や大槌、そして内陸にも広がっていくんです。ただし、お囃子に関してはおそらく太神楽のお囃子が付け加えられているんだろうと思います。歴史的にはまだまだ研究しないといけないところがあるのかなと思います。この虎舞というのは、千里行って千里帰ってくるというようなことわざによっても語られるような虎の習性にちなんで、漁民の航海安全を祈願するものです。なので、家内安全とか五穀豊穡とか商売繁盛とか、もちろん大漁祈願とか、基本的にそういうおめでたいお祝いの芸能ということになります。頭（かしら）は紙でつくる場合が多いですが、木で彫っているところもあります。虎をかたどった頭をかぶって、虎の柄を描いた幕の中に入ってお囃子に合わせて舞うというものです。大槌町は旧南部藩領です。南部藩領には和藤内の系統の虎舞があるんですけども、大船渡より南に行きますと、同じ岩手県でも仙台藩領なんです。仙台藩領にある虎舞は全然違っていて、虎なのに真っ赤な頭をしていて、どこから見ても権現様や獅子頭にしか見えない事例が多い。これは火防（ひぶせ）の芸能でして、歴史的には全く違うものと言っていていいと思います。ただ、それがクロスオーバーしてお互いに取り入れたりするようなことが近代になって起こっているということになるかと思えます。

今日来ていただいた城山虎舞については、代表がこの後お話しなさると思いますけども、実は非常に新しい団体なんです。私は震災後、支援の仕事を通して城山虎舞に出会ったんですけども、平成8年に結成された最も新しい虎舞の団体です。ですが大槌町の精神的なエンジンとして、地域復興にこれほど尽力して活躍した郷土芸能の集団というのはおそらくほかにありません。パフォーマンスも素晴らしいですけども、圧倒的な行動力で、あらゆるところにあらわれては公演をして、震災復興を多くの方たちに訴えてこられました。けれども、関西はなかなか遠いです。実は昨日、皆さんもよくご存じだと思いますけども、張り子の虎を授与品として配っておられる道修町の少彦名神社、神農さんですね。そこで虎舞を奉納して、ご近所の製

薬会社二軒で門打ちしてこられました。後でそういう話もあると思うんですけど、本日は午前中、阪神タイガースゆかりの廣田神社に行ってきました、見事な舞を奉納されました。このような形で、全国に活動を見せてくださっている団体かなと思います。

日高： それでは、これより城山虎舞のメンバーにバトンタッチをしていきたいと思います。虎舞の演目には何種類かあります。最初に代表の菊池忠彦さんのほうからその解説を簡単にさせていただいて、実際の舞を見ていただければと思います。それでは菊池さん、よろしくをお願いします。

菊池： 岩手県大槌町からやってきました、大槌城山虎舞と申します。まずは、このようなすばらしい公演を企画してくださったみんな関係者の皆様に、心より感謝、御礼申し上げます。くしくも先週、3月11日、東日本大震災より6年を迎えました。いまだ復興途中の大槌町であります。関西にお住まいの皆様をはじめとする日本全国の方々にご支援をいただき、おかげさまで地元・大槌でこうやって元気で生活することができております。今日はその我々の感謝の思いを、勢いある虎舞でもって皆様に感じていただきたい、そのように思っております。どうぞ最後までよろしく願い申し上げます。まず初めにごらんいただくのが「ちらし」です。「ちらし」は通常ですと神社に奉納する前に前振りのようなものとして行われるものです。お囃子、太鼓、笛、かね、そしてかけ声ですね。虎が一切出てこず、お囃子のみのもので。続いてごらんいただくのが「遊び虎」です。「遊び虎」は、春の日差しを浴びた2匹の虎が遊び、そして戯れる様子をあらわしております。続いてごらんいただくのが「跳ね虎」です。「跳ね虎」は、繁殖期を迎えた手負いの虎がアップテンポで激しく暴れ狂うさまをあらわしております。3つ目にごらんいただくのが「笹ばみ」です。「笹ばみ」は、虎舞の一連の踊りの中でも最大の見せ場、クライマックスでございます。虎がその最大の武器である爪や牙を笹を使って磨く様子をあらわしております。2頭の虎が登場し、まるで争うかのごとく暴れ狂うさまをあらわしております。そのまま手踊りへと移りますが、まずは「ちらし」「遊び虎」「跳ね虎」「笹ばみ」、4演目続けてごらんください。

〔城山虎舞演舞〕

日高：先ほどの虎舞、すごい迫力だったですね。美声を聞かせていただきました菊池さんに大きな拍手をお願いします。これからは、ディスカッションとして、「郷土芸能の保存科学—支援から協働へ—」というタイトルで話のほうを進めていきたいと思います。パネラーとして4人の方をお招きいたしました。城山虎舞の代表を務めておられます菊池忠彦さんです。その横におられますのが、釜石のほうで実際にご自身も芸能の実践者としていろいろな活動をされ、この東日本大震災以降、私たちみんなの共同研の仲間として、被災文化遺産所在調査専門調査委員をお願いしています、笹山政幸さんです。その横におられますのが、先ほど虎舞の解説をしていただきました橋本裕之さんです。そして、その横におられますのが、大阪市立大学から来ていただきました中川眞さんです。それでは話を進めていきたいと思いますが、最初に、城山虎舞の20年前の発足に至った経緯について、菊池さんのほうからお話をいただければと思います。

菊池：ちょうど去年の12月におかげさまで20周年を迎え、大槌町内の各郷土芸能団体あるいは関係各位などたくさんの方にお集まりいただき、大々的に20周年祝賀会を開催させていただきました。もともとは20年前に仲間内で何かを始めようじゃないかということで集まって、ならば大好きなお祭り、そして虎舞をやろうじゃないかということで、お隣の釜石市の老舗団体である尾崎町の虎舞さんから指導を受け、練習が始まったわけです。恐らく当時でいえば日本全国の郷土芸能あるいは民俗芸能において一番新しい団体だと思うんですけども、さまざまな方々のご協力によって活動してこれました。発足から15周年を迎えたちょうど6年前に、東日本大震災で津波に遭って、衣装、道具、お祭りの山車とかそれを保管する会館とかが全て流されたわけですけども、その後、各NGOの団体さん、あるいは全国の方々のご支援によって、少しずつ失ったものを再整備させていただいて現在に至っております。

日高：ありがとうございます。あえて釜石の虎舞を習おうと思ったきっかけというのはあったのですか。

菊池：大槌町内に我々の城山虎舞のほかには安渡虎舞、吉里吉里虎舞、陸中弁天虎舞、向川原虎舞と4団体があるんですけども、同じ町内でやる以上は、やはり他団体と少し違いを出したいと。そのようなことから、釜石の老舗団体をこちらから指定させていただきました。幸運にも受け入れていただきまして、踊りを習うことができた、そういうことでございます。

日高：つまり、大槌町に新しいタイプの虎舞が誕生していくということになったのですね。それから15年後に東日本大震災が発災することになりましたが、この震災をきっかけに実は私もここにいるメンバーとお知り合いになっていくということがあったんですけども、当時岩手におられた橋本さんは、研究者の立場からいろんな芸能支援という活動をもものすごいエネルギーで進められていました。そこに至る思いとか、どういったことだったのかということについて、ご紹介いただければと思います。

芸能支援の経緯

橋本：私は盛岡大学に勤めていたんです。3月11日のときは、新入生が大体決まっていて、4月に入学式を迎えるばかりだったんですけど、亡くなってしまって結局、会えずに終わってしまった学生もいました。多分皆さんも覚えておられると思うんですけども、高校3年生の最後の春休みは友達と遊びませんか。このメンツでもう一生一緒に遊べないということが多いですよ。なので地元に住む子たちが結構そうやって亡くなったりして。4月になって、私は県の文化財保護審議会の委員だったんですけど、何をしたらいいか全然わからなくて、ある方に1年生向けの大教室の授業で呼びかけてみたらどうだと言われました。そこで、何でもいいから祭りや芸能に関する情報をくださいと呼びかけてみたら、陸前高田市のうごく七夕に参加していて、今はもう学校の先生になっているある学生が、出席カードに助けてくださいと書いてきたんです。かなりぎょっとして、これは無視できないと思って、それが最初に動いたきっかけだったんです。震災の後に、歌舞音曲なんて不謹慎だという声もなかったわけではないんです。私自身も芸能の研究者だったはずですけども、そう思っていたところがあった。だけど、ちょうど百箇日法要の前後ぐらいから、学生の縁で現地に行くように

なって。それ以前は沿岸にほとんど行ったことはなかったんですけども、そこでいろんな方たちと会って、郷土芸能というのは地域再生ができてからすることじゃなくて、再生のためにこそ郷土芸能はあるんだ、祭りがコミュニティを再生させる最後の砦なんだということを実感して。それからもう、転げ落ちるよという感じですかね。しないといけないことが次々あって、助成金の書類を代書することなど、数多くの団体のお手伝いをするようになったというのが、とりあえずのきっかけになります。

目高: ありがとうございます。私たち研究者は地域に行き、橋本さんだったら芸能であったり、私だったら民俗学的な資料の保存であったりするのですが、そういうものがどのように伝わってきたのかを研究しています。こうした研究では、どちらかというと一方的に学んでいくというスタンスで地域の人々とかかわっていくようなケースが多い。ですが、今回の東日本大震災の場合には逆に、そういうふうにもいつも学ばせてもらっているフィールドにどう恩返しができるのか、研究者はいろいろな立場でそういったことを考えていっていたということがあります。

先ほど、この城山虎舞に関連する企画展のご紹介をさせていただきましたが、プロジェクトリーダーの竹沢尚一郎先生は文化人類学の研究者です。そして、東日本大震災が起こったときにとりあえず何かできないかということで大槌町に駆けつけて、写真の整理作業等々を手伝っていくなかで、被災地である大槌町の人たちの声を丁寧に拾い上げていって、その声の中からどう学べるのかということ进行分析されました。今回、その成果を企画展にあらわしているということです。研究という職が一方通行的ではなく、どちらかというとも双方向的な形でこれから進めなければいけないんだなど。そういう気づきをさせてもらえた、それが芸能団体の皆さんとの関係のなかに見えてくるということがあります。そういう私たち研究者とともに支援をやっていただく仲間ということで、笹山さんには非常に大きな力を発揮していただきました。笹山さんは釜石のほうで実際に芸能もされている方です。そこで、どう目線から芸能の支援をやっていこうと思ったのかということについて、お話しただけたらと思います。

笹山: 私の団体では太神楽という、大阪という獅子舞という芸能を継承して

いるんですけれども、支援を始めたきっかけは、津波で太鼓が全て流されたことです。三陸沿岸は津波の被害にたびたび遭っておりますので、獅子頭さえあればどうにか芸能は続けられるという先代からの教で、獅子頭だけは古参の会員の方の家に二頭なり三頭なり分けておいて、獅子頭だけは守れたわけです。ただ獅子頭はあっても、太鼓、衣装、何もないわけです。そのときに、助成団体から助成金の申請をしませんかという打診がありまして、そういう書類を送りますからということで、書類が家に送られてきました。それを見ますと、書く申請書類が5枚6枚とすごい。計算書から自分の団体の由来の細かいところから、いろいろ見積もりを出せとか。今まで芸能に携わってそういう書類を書いたことがありませんでしたので、最初にまず隣にいる橋本先生に「これ、どうやって書くんだい」と言ったら、意外と簡単に書くんですね。それを見たら、意外と俺でもできるんじゃないかなと。そのころにはもう橋本先生は大阪にいましたので、まさかそれだけのために呼びつけるのもだめかなと思ったから、自分でちょっと書いてみたら、何か通っちゃったんですね。それで、自分のところの団体だけ出し抜けても、やっぱり回り回ってこないと地域のお祭りにならないんですよ。

やっているうちに、違う団体さんから「おめえ、最近、助成金の書類の書き方、やっているらしいな」ということで、だんだん釜石市内のいろんな団体に話が広まって行って。みんな昼間仕事をやっているわけだから、「今日、夜6時にうち来て」とかと、いきなり知らない携帯の番号から自分の携帯に電話が来るんです。「どこそこの団体ですけど、今日6時に助成金の書類を書いてほしいから来てください」って、いきなり言われるんですね。わけわからずに行って、書き方を教えて。釜石も自分のつてがあるところはあらかた今は終わりました、釜石の市内からちょっと外れた鶴住居町というところを今は中心的にやっています。おかげで、助成団体さんからの多額の助成もあり、釜石は災害前にお祭りに参加していた団体は全て出そろいました。助成金も6年もたちますからだんだん件数も少なくなってはきたんですけども、震災前までとはいきませんが、最小限の道具はあと1年もしくは2年くらいで全ての団体がそろそろような形になっているというのが現状です。

日高：笹山さんは実は 2012 年にみんぱくのほうに来ていただいています。南部藩壽松院年行司支配太神楽という、岩手の沿岸の太神楽の中でも筆頭と言ってもいいぐらいすばらしい神楽の演者でもあられます。ご本人は、最近照れて太鼓とかを叩いてくれないんですが、とても上手で、すばらしい太鼓を叩かれます。さらに企画展にも大変協力いただいています。展示場には、白澤の鹿子踊と城山虎舞、そして吉里吉里大神楽の衣装を展示させていただいていますけれども、借用に関しては笹山さんに全部、交渉していただきました。笹山さんが日ごろ行っている支援活動を通した仲間意識から、衣装をお借りすることができました。私はさらに厚かましいお願いをして、着つけまでやってくれということで、展示前三日間、みんぱくに泊まり込みで着つけをしていただきました。笹山さん、この場をかりて改めて御礼を申し上げます。

展示の着つけのマネキンのポーズは、我々の中でいろいろとディスカッションしまして、それぞれの芸能、鹿子踊、虎舞、そして大神楽の動きで、一番見映えのする印象的なポーズを拾い出して演示をさせてもらっています。裏側から見たら、どれだけ私たちが苦勞して演示具を使いこなしながらあのポーズをさせているかということを見ていただけたらと思います。先ほどの虎舞を見ていただいたように、とても踏ん張る。踏ん張らないと滑ってこけてしまいますので。そこが虎舞の力強さということにもつながっているかと思うんですけれども、そこの部分をマネキンで表現するのはなかなか難しいのです。そういう視点でももう一度、展示を楽しんでいただければと思います。

ここでまた菊池さんにお話を聞きたいんですが、先ほど、太鼓が流れたという話をさせていただきました。それを再生して今もたたいておられるということですが、そうした経緯についてご紹介いただければと思います。

災害と保存科学

菊池：海岸線に道具の保管庫がありまして、津波ですぐさま流された。震災から、津波の2日後、3日後ぐらいから、メンバーとは連絡も全くとれないものですから、どうしたものかというところもあったんですけれども、何と

なく避難所で顔を合わせたとか、あるいは、たまたま私の家が津波の被害を免れまして、避難所に向かう通り道にあったんですけども、メンバーがうちに寄って、それこそ「生きてたんか」というのが合い言葉で、メンバー同士、うちで顔を合わせたり。そういう形で、震災の3日後ぐらいから、がれきの中を道具を探してさまよい歩いたと。太鼓は、たまたま消防署の署員の方が見つけてくれまして、おたくの太鼓じゃないかと連絡をいただきまして、見に行ったら、紛れもない、うちの太鼓でした。それを震災の2カ月後ぐらいに張りかえていただいて、使うことができた。その張りかえなんかもやはり支援によって張りかえさせていただいたんですけども。当時、町内には本当に至るところに郷土芸能で使う道具が転がっておりまして、名前がもともと書かないものですから、これはどこの太鼓だろうとか、これはもしかしてあそこの団体の太鼓じゃないとか、印半纏なんかはこのようにそれぞれの団体の名前が入っていますので一目瞭然わかるわけですけども、道具に関しては、名前が書いていないやつは、これはどこの団体のやつなんだろうということで、あちこちそういう光景が広がっておりました。うちの場合は、たまたま大太鼓が1個見つかったということで、それが本格的に活動できるようになったきっかけということです。

日高：太鼓というのは、一回潮や水をかぶったりしてしまいますと、皮の状態がとても悪くなります。胴なんかも、響かせるものですから、傷がいつてしまいますと太鼓としてなかなか使えないということがあるんですけども、城山虎舞さんの場合には一回被災してしまった太鼓をもう一度、本当の意味で再生させて今も使われているのですね。

さて、今日のディスカッションは「郷土芸能の保存科学」とタイトルにうたっております。私は日ごろ、特にみんなくに収蔵している資料、展示資料であったり収蔵庫にある資料であったり、そういったものを適切に管理し、壊れたら修理をするという、文化財の保存を専門としています。その技術をどのように開発していくのが研究の一つのテーマですけども、基本的にモノの保存が最優先されるわけです。どういうことかといいますと、ペットボトルが資料だとすれば、この形をきちんと維持させていくにはどうすればいいのかということが私の一番の大きなミッションになっていくので

す。この震災でつくづく考えさせられたのは、「このペットボトルを何とかしろ、直してくれ」と言われたら、直せませけれども、何でこれを直さなきゃいけないのかというところがわからないと保存する意味がないということです。当然、これを使っていた人の歴史がこの中に内包されているわけですし、これを残したいと思った人の気持ちもそこには込められている。そういうような人の気持ちも取り込みながら、モノの保存を考えていかないと、これはなかなか次の世代に伝えていけるものにはならないなということを実感したのです。つまり、今を生きている私たちがモノに対しての価値をきちんと見出し、正しく伝えていかなければ、ただこれを置いておいても、もしかするとごみを残しているだけのことになるかもしれない。そうならないためには、人の気持ちも組み込んだ保存科学をこれからも考えていきたいなと思っています。この点は、この震災でとても学んだといいますか、強く感じたということとして、今回の企画では、はばかりながらこのような保存科学のタイトルをつけさせていただきました。実はこのヒントをくれたのは橋本さんなんです。モノの保存ということに対して、人の思いについても重要なんだということを感じさせてくれたということで、このタイトルでいこうと2人で話し合っただけで決めました。そういう意味では橋本さんなりの保存科学ということについて教えていただけたらと思います。

橋本：ステージが二つあるかなと思います。ちょっと巻き戻しますが、もともと私は助成金の申請書類を書いたり、日本財団とか岩手県文化振興事業団、日本ユネスコ協会、ナショナル・トラストとか、各種の支援を仲介をしたりというようなことをしていました。最初は本当に申請書を持っていくだけだったんですけど、やっぱり書けないわけですよ。書き方なんてわからないわけです、普通の人。だけど我々研究者は、コミュニティの結束のためとか何とか、それらしいことを書いてしまうわけです。テンプレートをつくってこなしていけばいいだけなんですけども、それがなかなかできない。だからお手伝いするよりも、自分で書く方が早いなと思うことがあって。ただ、そこで考えなければいけなかったのは、被災した団体のニーズを聞いて、被災団体と支援団体の一番いいマッチングをどうつくるかということです。それをしなければならぬ。昔だったら地主さんがその地域に住んで

いて、地域の個別的な文脈をよくわかっておられて適切に支援することができたんでしょうけど、今そういう支援団体の拠点は東京だったりニューヨークだったりするので、文脈を全然知らないわけです。そうすると私のような、内陸ですが岩手県内の大学にいて、中間支援者になるような立場の人間がチューニングをしていく、マッチングをしていくみたいなことがあって。さまざまな支援のよりよい組み合わせをどうつくるかということを考えておけば、今後こういうことが起こったときにも対応できる指針は提示できるんじゃないかなと思ったんです。

もう一つは、先ほど笹山さんが、私がやっているのを見て、「何だ、簡単じゃないかと思った」とおっしゃったわけですが、本当にそうなんです。だから私はいろんな研究者と一緒にやろうって言ったんです。でも、どうしてか知らないですが誰もやってくれなくて、すごく腹が立ったりしました。そうこうするうちに笹山さんは、私が車を運転しないので、いろんな場所にいつも連れていってくれたんです。実は彼も被災しているのです。仮設住宅に住んでいるんですけど、ものすごく長い間泊めてもらって、私が支援されているような状況で、あちこち回るようなことをしているうちに、彼がそういう活動をやるようになってくれた。私は大阪に戻ってしまったので、なかなか活動できないということもありましたし、本来ならば研究者がもっとやってもよかったんじゃないかと思うんですけども、意外なところに仲間がいた。彼以外にも何人かおられるんです。被災した団体のなかである種のリテラシーを持っている方たちが、自分の団体を助けることから、ほかの団体を応援するようになっていった。これは被災者による被災者への支援という意味で、長期的にはとても意味のあることだろうと強く思っています。

ただ、その後のことでは、保存科学というテーマを提案したんですけども、有形というのは、例えば仏像の首がちぎれたら首をつなげばいいわけですね。ちょっとごめんなさい、不謹慎ですけども。塩漬けになった古文書があったら、脱塩処理をすればいい。カビがあればカビを取ればいい。日高さんは薬品とかを使ってそういうことをするわけです。何をやっているのか私はわからないのですが、魔法使いのようにきれいにしてしまう。割れたものもきれいになって戻ってくる。普通できないですよ。これは保存の自

然科学だと思っんです。でも、保存の社会科学もあるべきじゃないかと思っています。それはずっと開放系ですけども、支援団体と被災団体の間をつなぐような中間支援の方法を構築していくことだろうと思っています。だから保存科学というのを複数化していくことが、郷土芸能を通してできるんじゃないかと思います。というのも、仏像は生きていないので、つなげばそれで終わりです。でも、例えば城山虎舞もいろいろお手伝いしたんですが、ぴかぴかの道具が支援できて装束も整備できたとしても、そこに人がいなかったら無用の長物です。岩手の冬は寒いですから、外で稽古はできない。そうすると稽古をする空間が必要です。また、道具を置く空間も必要だということになってきます。でも、空間が用意できとしても、地元に住んで働く人がいなかったら、やはり意味がなくなってしまう。そうすると最終的に、雇用をどうつくるかというようなことだって、文化財の保存科学のミッションになりそうです。そうしてどんどん広がっていくなかで、郷土芸能の保存科学がどうあり得るのかということを考えているところです。

日高: ありがとうございます。自然科学をベースとした保存科学、社会科学をベースとした保存科学、これも一つの協働という形で何か大きなことができるんじゃないかというお話だったと思います。中川さんに、ひとつここで、今のお話を聞いていて、こうしたことの可能性については、どうでしょうか。ご意見いただければと思います。

文化による復興

中川: 私はこれまで東北とは全く縁がなくて。見知らぬ人だった橋本さんから、ある日メールが来て「手伝ってください」と。なぜなら2006年にインドネシアのジャワ島で大地震がありまして、私はそのときに支援という方向へ行きまして、文化による復興というテーマを掲げてやっていたわけですが。でも阪神・淡路大震災のときは全く何もできなかった。神戸では、例えば避難所にいきなり演劇の人が行ったりすると、何しに来たんやとどなられた。つまり文化による支援の方法論がほとんどなかったんです。美術関係ではすごく立派な仕事をなさった島田(誠)さんという方がいるんですけども、我々の領域であるパフォーマンスアーツ関係では方法論がなくて。

社会の復興、インフラが全て整ってから音楽とか演劇とかをやればいいじゃないか、支援すればいいじゃないかという考え方が一般的だったんです。

でも、それはちょっとおかしいんじゃないかと。なぜそう思ったのかというと、インドネシアの被災地へ行ったとき、音楽家とか演劇の方とかががんがんコミュニティに入って、ワークショップといますか、みんなと一緒にいろんな活動をやっていた。それを目の当たりにして、文化によるアプローチというのはいっぱいやれることがあるんだなということを知りました。支援に行ったといっても、私はお金を渡すだけで、逆に現地でいっぱい学んだのです。ただ、2011年の震災が起こったときに、遠隔地の自分に一体何ができるんだろうかという問題がありました。震災直後の報道映像を見ながら、何をしたいかわかりませんでした。でも何かしたい、どこへ行けばいいのかと悶々としていました。そんなとき、3月の末だったか、たまたま橋本さんから「助けてください」みたいなメールが来たわけです。「この人は何をやる人なんだろう？」と私は思いました。橋本さんも「助けてください」と誰かに言われて、さらに私へと伝染していったのですね。では、何ができるんだろうと話し合っ、東北だったらやっぱり民俗芸能でしょうということで意見が一致したんです。いま彼が少し言ったけれども、どうしたらその活動が成り立っていくのか、楽器や装束の修復だけではだめでしょう、活動の基盤をつくりましょう、と。

それで、例えば神楽だったら神楽宿になりますね。この笹山さんの家は実は有名な神楽宿でもあるんです。僕が感動した話があります。3月の震災があつて、その次、ちょうど一年後の1～2月ぐらいが神楽の一番の活動時期なんですが、もう絶対に神楽の巡行は無理だろうと誰もが思っていた。ところが笹山さんが百何十キロ離れた釜石から普代村まで来て、宮司さんに、神楽をやらないと絶対だめなんですと言ったんです。宮司さんは尻込みした。「えっ、そんなこと。ちょっとこの状態で何うなんて、めっそうもない」という感じです。つまり神楽を招くにはすごい支度があるし、食事もあるし、泊まってもらわないとだめだし、かなりの出費が出るわけです。ところが笹山さんは、神楽が絶対要るんだという。なぜそこまで主張したのかは、後でわかったんですけどね。それで、「うん」と言ってくれるまでは帰らないと

か言って、鶴鳥神社に居座るわけです。すごい大きな車で乗りつけて、怖い感じで、もう帰らへんとか言って。それで宮司さんも、「わかりました。参ります」と言って、1月下旬、ちょうど震災から10カ月後ぐらいに、釜石の箱崎白浜という、三百人超の集落で三十人以上亡くなって、家もがたがた、そういうすごいところで神楽宿をやった。

そういうリアルな彼らの活動を見ていくうちに、私もこれは本気でおつき合いせなあかんと思ったんです。奥さんの奈奈子さんもいま客席におられますが、キーパーソンがすごく大事で、このご夫婦は地域のキーパーソンなんです。震災で、住民は避難所ではばばらになっているでしょう。箱崎白浜の人たちもばばらになってしまった。お祭りだけがみんなを集めることができる。みんなここに集まって帰ってきてほしい、それでコミュニティーの再生の話をしようではないかと。行政の方がおられたらちょっと申しわけないんですけども、行政のタウンミーティングよりも、お祭りとか芸能とかの方が人々が集まりやすいし、心が一つになるわけです。そういうプロセスを私は現場で橋本さんと一緒に見てきました。保存科学の社会的なアプリケーションといえば難しい言い方になりますが、こういう形のコミュニティーの関係性の再構築を芸能は果たし、私たちの活動はそれを補助していくことになるのかなと思います。

目高： 災害という非常に緊迫したといいますか大変なときには文化は後回しでというような言葉はやっぱり至るところで聞くんですけども、よくよく冷静に考えてみると、文化というのはその地域で必要だから文化になっていると思うんです。そういう観点からすると、やはり大変なときにこそ、自分たちの文化を見詰め直すという視点はとても大事じゃないのかということ、中川さんの話を聞きながら改めて思いました。

じゃあこの文化の次をどうするのかというと、継承の問題ですね。それを考えていかなければ、まさに保存できないことになっていくかと思います。今日は城山虎舞のけっこう若いメンバーが集まって来てくれました。なかでも、今年高校を卒業して、これから社会人1年生となっていく若者が3人。また、これから2年目を迎えようとする若者も来て来ています。このような若い世代が、城山虎舞だけじゃなくて、私たちの社会というものをしよっ

ていく立場になっていくかと思うんですけれども、菊池さんたちのほうでは若手育成に関しても非常に熱心な活動をされているというお話を伺っていますので、そのことについてご紹介いただければと思います。

若手育成と継承

菊池：全国各地の郷土芸能・民俗芸能団体というのは、そのバックボーンとして地域というのが一番あると思うんです。自分の地元で継承されている芸能だから自分の地域の団体に参加する、ほぼほぼそういう流れだと思うんですけれども、大槌の場合は、その地域がなくなってしまった。団体の地盤というか基盤としている場所がそれぞれ山側のほうに移ってしまったとか、活動の基盤としている地域がなくなってしまったということは、今後を長い目で見ると、人がなかなか集まりづらい状況になってくると考えられるわけです。この6年で、芸能を再開するために道具集めに走ったり、さまざまな団体が再建するために動いてきたわけなんですけれども、徐々に道具がそろいつつあり、そして活動が、震災前のような環境とまではいきませんが、だんだんいい環境でできるようになってきた。じゃあ次は何だろう、やはり人材育成。せっかく支援していただいてそろえた道具を次の世代に伝えていかなければならないということに、考えがいくわけです。

日本全国に少子高齢という現実がありまして。大槌町の場合は町内に19の芸能団体があるんですが、そのどれもが休むことなく、やめることなく、震災後も続いているのです。最後には、競合といいますか、人のとり合い的なものですね、いずれは何となくそういうことが想像されるわけです。それを防ぐために、学校の生徒さんとか小さい子供たちを対象にして、地元の郷土芸能はこれだけすばらしいんだよということを、学校の課外授業という形で伝えられたらいいなと。そして間口を広げて、より多くの子供たちが参加できるような形にしたらいんじゃないかと。ということで、大槌学園といって小中一貫の学校が去年の9月よりスタートしたんですけれども、その学園長先生とお話をしまして、課外授業という形で、大槌町の歴史に絡めて、お祭りとか郷土芸能を子供たちに教えていこうというプロジェクトが、つい先日スタートしたところです。夏前ぐらいには課外授業をやろうと

いうことで、いま資料づくりをしているわけですが、虎舞だけに限らず、広い意味で大槌町の郷土芸能をとにかく伝えていこうということで、いま各団体が一生懸命そのことに取り組んでいます。

我々の団体は、日高さんよりさっきご紹介がありましたけれども、3名の高校生のうちの2人が、虎舞をやりたいということで地元に残ってくれました。1名は泣く泣く地元を出て就職することになりましたけれども、お祭りとかの時期には必ず帰ってきて力になってくれると思います。うちの場合はそういう形で、若い子たちが一生懸命やってくれている。中には若いメンバーが少なく、結構な高齢の方々が頑張っていて継続している団体もあるわけです。広い意味で考えて、その部分をやはり大槌町の郷土芸能全体として若い世代に伝えていこうということで、取り組みが始まったばかりということです。

日高 後継者については、少子高齢化という時代のなかでなかなか難しい問題になっています。昔は郷土芸能と学校教育というものが結びつくことはなかなかなかったと思いますが、菊池さんたちの活動は、そういったものを突き抜けて、新しい可能性を模索していく、広げていく可能性を示唆されているのではないかと思います。

また、ここで中川さんのほうに話を振りたいのですが。今朝、廣田神社に奉納されてきたというお話をしました。確かに城山虎舞には阪神タイガースのファンがいて、今日もセットの鼻緒にタイガースのマークをつけてきている方もおられますけれども、別にその人のために行ったわけではなくて、虎舞の一つ新しい展開ができないのかという可能性を、中川さんあるいは橋本さんを中心に進めていこうとしているというところがあると伺っています。その点についてお話しいただければと思います。

虎舞の移植に向けて

中川 橋本さん、菊池さんと話し合っているんですけど、これから未知の領域を展開していこうと思っています。何をするのかというと、城山の虎舞を関西に移せないかと考えています。つまり関西の城山虎舞。城山と名付けなくてもいいかもしれませんが、関西に虎舞をやるチームをつくりた

いなと思っています。今ごろんになったみたい、ものすごいハイレベルな芸能ですから、ほんまにできるんかいなとすごく不安なんですけど、ぜひやってみたい。関西にもやんちゃな若者はいっぱいいるし、阪神タイガースもありますし、だんじりとかがありますよね。そういった風土があります。ぜひ、若い人たちに城山の虎舞を習ってもらいたいなど。結果として、関西で虎舞を演じ舞っていく人が生まれる。もちろん拠点となる場所を探していないといけないんですけど。震災を通してこうやっておつき合っていて、我々は学ぶことが多くあるけれども、いつも城山の方々に来てくださいと言ってるよりも、もっと我々が積極的に介入し、例えば虎舞を関西の人間でやってみようではないかという、積極的なアプローチをあり得るのかなど。本場からお招きして素晴らしいパチパチパチじゃなくて、もっと踏み込んでやってみようと2年ほど前から橋本さんとお話しして、菊池さんにも協力をお願いしております。「うーん」と思っているかもしれない。そうして虎舞を関西の芸能として育てていって、東北とのつながりを定常化させていく。これは震災の記憶の風化にあらがうことにもつながると思っています。

しかし震災だけでなくモチベーションが続くかというといったら、多分続かないと思うんです。もちろん震災がきっかけだけでも、虎舞のおもしろさとか新しさとかいったものを関西でつくり上げていって、東北との相互交流をずっと続けていけばいいなと思っています。場合によっては、ツーリズムというか、関西の人が本場の虎舞を岩手まで見に行きたいやんかと思って、東北旅行に出かけていく、そういうきっかけにもなればなと思っています。これってすごくわざとらしい、人工的じゃないかと思われるかもしれませんが、そもそも文化が動くときは必ず誰かが介在しているんです。基本的に人為的なんです。例えば江戸時代から明治になって西洋音楽が入ってきましたね。西洋の文化を移植し人工的に始まったけども、いまでは普通にやっているわけです。誰かが必ず介在し、自然発生ではあり得ないです。

そういうふうな感じで、人為的に見えるかもしれませんが、未知の領域に挑戦したいなと思います。保存ということは、単にそのものの形で保存する

んじゃなくて、スピリットというか、保存を念頭に置きながらも、形を変えつつぐーっと広げていくというのも私は保存の一つの姿だと思っています。つまり協働的な形態が保存的活動の核になるのじゃないかと思っているんです。実はこの話はこれまで秘密裏に画策してきたんですけど、こんな大勢の人たちの前で話をしたのは今日が初めてです。ちょっと興味を持って、やってみたくとか、うちの高校のクラブでそういうやんちゃなやつがいっぱいおるぞとか、そういうことがあればぜひ手を挙げてください。虎舞を教えに来てもらえますので。一緒に関西の文化の一つとして虎舞を育てていけたらと思っています。それで、甲子園球場で楽天と阪神がオープン戦をやったらどっちを応援したらええのかわからんというようなややこしい状況に持っていきたくない、それおもしろいやんかという大胆な発想というか。菊池さん、いいですかね、こんなことで。〔会場より「お願いします」の声あり〕

菊池：大丈夫です。

中川：大丈夫ですって。菊池さんは本当にものすごくお話がうまいし、パワーもあるし、体力的にもまだまだ長生きしそうなので、大丈夫ですよ。ということで、何かわけのわからん話になりましたが、でも真面目ですよ。本気に思っていますので。

日高：そうですね。菊池さん、教えに来てくれますよね。

菊池：ぜひ。よろしくお願いします。

日高：橋本さんのほうからフォローしていただく部分もあるかと思うので。

橋本：確かに中川さんは何かわけのわからないことを言っているようにも聞こえたかもしれませんが、先ほど私は三つの段階を言いました。道具の支援、場所の支援、雇用環境の整備。でも、そもそも人が減っているわけです。震災があったりしたら特にそうですけども、日本中で文化財を担う人が減っていることは確かです。そうしたときに、菊池さんたちは学校とも密に連携されていますが、さまざまな取り組みがあちこちで見られます。震災の後に起こった一つの現象は、当事者と私みたいな部外者が一緒に何かをする状況ができてしまったということです。ちなみに私は、笹山さんが神楽宿をなさっている鶴鳥神楽のメンバーになってしまいました。大したこと

はできませんけども。ずっとするつもりは必ずしもないですが、どうなるかわからない。それがいいことかどうかわからない。私は本物じゃないですから。でも、一緒に何かを担っていかざるを得ないような状況も、早晚出てくるだろうと思うんです。そうしたときに、無形民俗文化財の保存は、今までの文化財保護法だと映像を記録して報告書をつくって終わりです。でも、おかしくないですかね。保存なんだから、それがそのままそこにあるようにしたいはずです。例えば希少生物だったら、それが生きていけるようにする。天然記念物だったら、それがなくならないようにする。物であっても、その物が残るようにするわけですね、遺跡とかも。

ところが、「なんで民俗芸能は映像を撮って報告書をつくったらそれでいいわけ？ 保存になってないやん」と思うんです。保存するというのは、それができるようにするということですよ。だったら、いま中川さんがおっしゃったように、観光だってツールになるかもしれない。批判はあるのはわかっています。例えば今回の、関西虎舞というのか何になるかわからないですけども、もしできたら、遠隔地でも一緒にやっていくことができるかもしれない。大槌に移住する人が出てくるかもしれないし、城山虎舞の上野さんは逆に大阪に来てしまうかもしれない。上野さんというのは阪神タイガースが大好きな方のお名前です。そういう交流があってもいい。そして、保存の新しいあり方を模索する試みにもつながるんじゃないでしょうか。城山虎舞は平成になってからできた新しい団体だからこそすごいチャレンジャーですが、それは伝統に拘束されている団体ではできないです。城山虎舞しかこういうかなりいかれた話をまともに聞いてくれるところはないだろうと私は思っています。もしかしたら城山虎舞のメンバー全員が知っていたわけじゃないかもしれないので、うちの会長は何を言っているんだと思っておられるかもしれませんが、関西に虎舞を移植して二次創作するというようなことを通して、大げさに言えば、民俗文化の未来に向けた保存の社会科学に関する指針が提示できるだろうと本気で思っているのです。城山虎舞は男性だけですが、菊池さんは女の方がやってもいいんじゃないのと言ってくださいました。関西だったらいろいろな新しい形もあり得るかもしれません。

支援から協働へ

日高：ありがとうございます。だんだん今日のタイトルの意味がわかっていただけたんじゃないのかなと思います。東日本大震災を通じて、私たちは支援に入ったのですが、逆にその支援活動を通して、現地の菊池さんをはじめ、あるいは笹山さんをはじめとする人たちから多くの学びを得て、この人たちのエネルギーとともに何か新しい展開ができないのかと、次のチャレンジに向けて今後とも頑張っていきたいと思うようになりました。では、これから舞台上で、もう1度虎舞、先ほどご紹介しました若手がやります。若い虎です。どうぞ楽しんでください。

菊池：それでは本日の2回目の虎舞をごらんになっていただくわけですが、日高さんからありましたように、先ほどは私が太鼓をたたかせていただきましたが、今度は若手に太鼓をたたいてもらいます。踊りは1回目も若手が踊っているので、踊りのほうは変わりませんが、ただ、より皆さんの近くに虎頭を近づけさせていただいて、少し趣向を変えてごらんになっていただきたいと思います。先ほどありましたように、関西に虎舞をという、そのような一つの大きな目的もございます。より近くで感じていただけたらと思います。それでは、よろしく願いいたします。

〔城山虎舞演舞〕

菊池：どうもありがとうございます。それでは、最後になります。手踊りの、先ほどご紹介した「大漁唄い込み」に続きまして、「南部俵積み唄」、これをやはりお祭り風にアレンジしたものをごらんいただきます。本日この会場にいらっしゃる皆様はもとより、全ての方々が幸せであるように祈念しまして舞を披露したいと思いますので、どうぞ皆さん最後までよろしく願いいたします。

〔城山虎舞演舞〕

日高：すばらしかったですね。最後にもう一度、拍手をお願いします。それではこれより、閉会の挨拶をさせていただきたいと思います。閉会の挨拶につきましては、国立民族学博物館副館長の吉田憲司よりご挨拶申し上げます。

吉田：皆さん、今日は最後までおつき合いいただきましてありがとうございます。大変な迫力、若いエネルギーの爆発だったと思います。爆発と同時に、極めてコントロールのきいた、そういった身体の爆発をお見せいただけたと思います。この後ではもう言葉は全く要らないかと思いましたが、私が三陸の虎舞を初めて拝見したのは、震災の4カ月後、釜石の港まつりの場でした。周りは瓦れきの山。その中で虎舞が繰り返し演じられていきました。それぞれの舞は今のよう非常にエネルギッシュな舞であったわけですが、それを見ていて、芸能というのは人間の存在の核心なんだというのをその場で確認した思いがいたしました。今日も何人かの方がおっしゃっておいりましたように、震災の後、多くの方が亡くなっているのに祭りどころではないだろう、芸能どころではないだろうという声がか確かに聞かれました。しかし実際には、その後1年間、それまで以上に活発に芸能の奉納がなされ、さまざまな地域で祭りが開かれました。東北の各地へ行きますと、祭りをしないと散り散りになった者たちが一緒に集まる場がないんだということを皆さんおっしゃっていました。それをお聞きしたときに、まさにコミュニティの存続の核心、コミュニティと一緒に人間が生きていくという、その核心に芸能というものがあるんだということをつくづく実感をしたわけです。今日は皆さんもその芸能の力というのを十分にご理解いただけたのではないかと思います。保存の話が出てまいりました。城山の虎舞を大阪へ移植するという。公の場で今日が初めてだということでしたけれども、みんぱくをそういう場を選んでいただいたというのは大変名誉なことだと思っておりますし、多分これは中川さんと橋本さんの作戦ではないかと思えます。中川さんは未知の領域とおっしゃっていましたが、多分、芸能というのは実はこういう形で広がってきたんだろうと。神楽のことを考えましても、あるいは獅子舞のことを考えましても、山伏の人たち、あるいは御師と呼ばれるような人たちが日本各地をめぐるって芸能を広めていった。城山虎舞は 20

年のまだ若い歴史だということでしたけれども、今日はそういう意味では皆さんに、芸能の誕生と広がり現場に立ち会っていただけたのではないかと、そういう場に我々は居合わせたんだという思いをいたしました。今日の舞も、それから唄い込みも、大漁の祈願、さらには復興の祈願だというお話がございました。我々もその復興の祈願と一緒にさせていただけたのではないかと思います。今日は、菊池さんを初めとして城山虎舞の皆さん、それから笹山政幸さん、そして中川眞さん、橋本裕之さん、そして司会の日高さん、本当にありがとうございました。皆様、今日は最後までおつき合いいただきましてどうもありがとうございました。みんなはまだまだこの後もさまざまな形で大規模災害の復興の支援にかかわっていくつもりであります。皆さんのこれからのご支援をお願いいたしまして、私のご挨拶にかえさせていただきます。ありがとうございました。